
異世界でお医者さん目指します。

ヤマタカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界でお医者さんを目指します。

【EZコード】

N8859Y

【作者名】

ヤマタカ

【あらすじ】

病で死に、次に転生した先は魔法とファンタジーの世界だった。前世での記憶があるアルトは、その知識を生かしながら前世で自分を死に追いやったそれと唯一鬪える職業、『医者』を目指す。

けれど、彼の周りには天才画家や最強美人など、奇怪で変人な連中ばかり。しばしば騒動に巻き込まれたりドタバタしたりはするものの、ほのぼのマイペースに医者への道を歩んでいく、ほんわか異世界物語。

この小説は、主要登場人物が主人公以外、ほとんど女の子と

なつておつま。やうこつのが苦手な方は、注意ください。

お医者さん曰く

急性硬膜下血腫。

頭蓋骨の内側で脳を包んでいる硬膜と、脳の間に出血がたまつて血腫になったもの。

何かよくわからないが、そんな病氣で俺の生涯は幕を閉じた。高校三年の秋だった。病氣でぶつ倒れた時は「ああ何でこんなことに」と散々悔やみ泣き絶望し……。色々あつたものの、いざ死ぬ直前となれば「いい人生だった」と年甲斐もなく悟つたものだ。

そんな、前世だった。

転生……といえば聞こえはいいが簡潔に言えば来世。俺はまったく違つた世界で生まれた。

そこはよくゲームで遊んでいたファンタジーな世界で、魔法や騎士、ローラッパ顔負けの幻想的なもの。城壁が都市をぐるりと囲み、その中で国を治める王様が民を守り、また導く。

国の名はザヴェード。

約百年前まではこの世界で大地を二分するアシュランと戦争（冷戦ともいえる）状態であったが、何人かの集団によつて協定が結ばれる。たつた一つの集団に？ おいおい、そんな非現実的なことあるわけないだろう。戦争を終わらせたんだぜ。十中八九、何かしらの要因があるのだろうが、それを知る方法や術は当然ながら俺にはない。

今思えばこいつらの疑問が当然出てくるし、その答えを知ろうとも思つたが、結果として世界が平和になつたのは事実であり、何だからそれを探るのも野暮なような気がする。特に問題もない。知りたいとは思うが、死ぬほど切望していることでもない。そんな世界の

概要を知つたのも……俺が五才の頃。

丁度、前世の記憶を取り戻した時期と同じ。

高熱を煩つて、三日三晩寝込んでいた。夢の中で前世の物語が段階的に始まって……一日一章ずつの全三章構成だった。誰が作つたんだと突つ込みたいが、まあ記憶が戻つてしまつたのなら仕方ない。最初は変な夢だなと思つたけど、最後の三日目。

一気に前世での生涯全てが身体全体に入ってきた感覚になつた。上手く表現できないんだけど、寝ている自分の中に光る粒子がフワアアと流れゆくもの。そうして、前世での記憶がはつきりとありながら、俺は今を生きることになつた。

あつちの世界では悲しい最後を迎えていたが、こつちの世界ではそんなへマはしない。

何故かって？ そりゃ……ね。

自分、お医者さんです。

王都ザヴェードの中にある一軒家、『シャーロック医院』の一人息子。

それが俺こと、アルト・シャーロックだ。仲がいい人からは「アルル」なんて呼ばれてる。

記憶が戻つてから十一年。現在十六歳。

正直言えば、何度かあつちの世界でのことも想つた。それは確かだ。今の生活からしてみればそれはもう凄くて、超技術にして未来的だ。ネットで毎日動画や海外のニュースとか見ていたあの頃を懐かしく思う時もあるわ。

けどね、けどさ。

「いつも負けでらんないぜ。ゲームの世界だけと思っていた、科学ではまず解明できないだらつ『魔法』。王国騎士。西洋の景色や街並み。何百というギルド。

前世では将来設計や周りの田とか、そんなある意味息苦しことさえ思えた毎日が、ここにはない。あるいは今この時を楽しく、刺激的に過ごすという人間たちの賑わい。そして「」が野望や想いを成就させようと動く時代。

いいね、すばる。こんな世界も、あつたんだ。

だから、俺はこの世界が好きだ。あの世界を知っているからこそ、この世界が好きだ。

何より、今はやりたいことがある。田舎していることがある。

俺の生涯を終わらせた病。それと戦うことが出来る唯一無一の職業。さらにはそれを目指すのにこの世界では『魔法』とかいう非常識が付いてくる。それもこれも、俺の努力次第ってなもんだ。

やらないわけにはいかないさー！

さつきも述べたけど、幸いこの世界では丁度戦争がなくなつた。戦争に駆り出される心配もなく、自分のしたい道、やりたいことに一生懸命猛進できる。そういう環境が整つた世の中。やるかやらなかは、自分が決める。決められる。

「いい天気だなあ」

そう言つて、一階にある自分の部屋の窓を開けた。朝日が眩しく身体をつつむ。

ここ数日雨続きだったけど、どうやら今日は晴れのようだ。天気

予報がない今だから、その日その日で天候がわからないうちの世界ならではか。

めでたく一回生となつた俺が迎えた、最初の学期試験も無事終えて。

今日は現在俺が通つてゐる医術学校の、年に三回ある試験のうち、一番目の試験が終わった翌日。一回生の頃は結構しんどかつたけど慣れてくると案外大丈夫だつたりする。普通の学生なりのまま学校へ行く準備をして向かうのであるが。

俺の場合、ちひつとした朝の通例があるので。

「アルトー、起きてるならコナちゃんのところに朝ごはん持つて行つてくれるー？」

「はいよー

そう。

あいづこ、彼女に朝食を持つて行かねば。

その子は、ザヴェード王国随一の画家にして、俺の幼馴染。どういつ子かつて言つと

「アルトー、起きてるなら返事しなさい！」

「さつきしたじやないかー？」

ああ、もう。せつとと行けばいいんだが。父さんとは違つて母さんは短気なのだ。

すぐさま一階に降りて彼女の朝食であるパンとスープ、それにレタスを持つて（あれ？ 僕のがない）家を出る。そこは城下町であり、人々の生活の場。

小さな子供たちがふざけ合ひながら学校へ行く姿。馬車に乗つた貴族が遠出するのかガラガラと道を下つていく姿。新聞屋である二

「コルさんが自転車でパフォーマンスしながら新聞を配る姿。美味しいマフィンを路上で売買するおばさんの姿。

一人一人、今を生きる人々。俺も例外なく、その一員。

「わるくないね」

うちの家から道を挟んだ向かいに彼女の家は建っている。
家を出ればすぐ目の前だ。別に俺が持っていく必要はないんだけど、俺じゃないと彼女は拗ねてしまう。天才と呼ばれているのに、中身は意外と幼いのである。

馬車が通り過ぎた後、ニコルさんに手を振つて、マフィンを売つておばさんに一礼して、俺はその家の扉を開く。合鍵は常備持つてるので大丈夫。……あいつが鍵閉めたことなんてないけどね。俺がいつも閉めているんです。無用心すぎるだろ。

そう思いながら、扉を開ける。これも一つの日常に過ぎない。
けれども、前世の記憶がある俺にとっては毎日がとても新鮮で、面白いもの。異世界にて、医者を目指す青年の、どこにでもある、平凡な物語

……だといいな。

天才画家

ラテン語で絵のことを「ピクトゥーラ」と言つやうだ。英語の picture の語源もある。

前世での記憶もかなり曖昧なれど、たまに役立つときもままあるもので。何故、そんな話をこんな異世界するのかといふと、意外や意外。不思議と世界は繋がっているのかもしれない。

この世界で、画家のことを「ピクトゥー」と呼ぶやうだ。正直驚いた。

んで、ある少女のことを敬意を表して“ピクトゥ・レックス画家の王”と総称している。誰のことか。決まっている。うちの向かい側にデテンと建つていてる家に、一人で暮んでいる我らがザヴェード王国随一の天才画家。

ユナ・」・サルジエリアである！

「起きろよ、天才」

「……あー」

埋もれている。正確に言えば下敷きになつてている。

キャンバスに絵の具、模造紙にバケツ。色紙と水彩用紙に、筆に折りたたみ椅子。スケッチブックに帽子にバッグに水入れに水筆に布切れに固形絵具に本に辞書にコップに皿におやつにパンにストローにダウンにランプに……あれこれ他多数。

ここ一週間、俺は医術学校の専門試験の最中であつたため、朝と夜（昼は食べない主義らしい）は彼女の家の扉を開けてすぐ下に食事を置き、そのまま全力疾走で学校に行つていた。母さんがいつもそれを回収するのだが、昨日から何故か食べた形跡がなかつたらし

い。

食べなかつたのではなく、食べれなかつたのだ。

「いつも通り、ここに朝食置いておひさと帰つてもいいんだが？」

「あー。あー。あー。……あ？　おお？　その声はもしかしてアーチャン？」

「もしかしなくとも、そうですが」

「おおお！　アーチャン、アーチャン！　助けて、今にも死にそうなんだよお！」

埋もれている残骸の下から、その女の子は精一杯の声で助けを求める。

「一日何にも食わずに生きてるんだ。別に助けなくとも大丈夫ですよ」

「うん、まあそなうなんだけどね。別にこのまま一人で死んでも特に問題ないかなあと思つていたんだけどね。でもね、でもさ。今ボクの近くにいるのがアーチャンなら話は別だよ。ボクが世界で一番側にいたいアーチャンがいるのなら話は別さ。ああ、アーチャン。今ボクはすつじくこから抜け出したいよ。迅速に的確に今すぐにここから飛び出したいよ。でもね、でもさ、アーチャン。えとね、何故かボク、抜け出せないんだ。何でだろひ？」

「とても一日中飲まず食わずに生きてる女の子のテンションとは思えないほど、彼女の口は元気だった。」

まあこれだけ体力や気力があるのなら、あと数日はもつのだらうが、ここで俺が帰つてその反動で自殺されても困るので、やれやれとばかりに埋もれている彼女を救助する活動を始めた。

ついでに、一週間ぶりに部屋の掃除と床拭きもかねて。

余談だが、救助中も彼女の口は引っ切り無しに話していた。

「やほやほー、元気だつたアーチャン？　じこ一週間全然会えなかつたけど」

「学校の試験中だつたんだ。ユナの健康状態も気にはなつていたけど、まさか埋もれているとは思わなかつたよ」

「うん。ボクも埋もれちゃうとは思わなかつたよ。ふと食べ物に絵を加えたらどういう作品になるのかなあ、なんて思つてたらいつの間にか埋もれちゃつてて。困つたね」

「俺はお前の思考に困つてるよ。何だ食べ物に色加えるつて……。あとさ、いい加減」

「ん？」

「『それ』止めないか？」

「嫌。じゅーでんちゅー」

現在、眼下。

ユナは俺に抱きついている。抱き憑いている。駄々付いている。彼女の紹介については、もう特にする必要はないだろうか。たつた今お送りした一連の流れで充分であろう。ユナ・L・サルジエリア。ザヴェード王国随一の天才画家なのだが、中身はかなり変わっている。同じ十六歳とは到底思えないほどの人格者である。

(本人が長いと邪魔という理由で) 髪はショート。色はエメラルドで、瞳も同じだ。

画家ということもあり、服装には常に絵の具やらペンキやらがべつたりくつ付いており、逆に可憐なドレスやワンピースを着ている姿はまず見たことがない。最後に見たのは、四オペラの時か。

彼女は、一人暮らしである。

理由としては、この世界ではよくある話で両親が出稼ぎしている

最中に崖から転落死したというもの。盗賊や野犬に襲われなかつただけマシなのかもしれないが、五才の誕生日を間近に控えた彼女にとつて、その事実は衝撃的なものであつた。両親の死を聞かされた瞬間、ユナは卒倒し意識不明に陥る。そして、二ヶ月後奇跡的に目を覚まし、一心不乱に絵を描きたいと言い出して、初めて描いた作品が……。

現在、ザヴオード城の大広間の中央に飾られている。

タイトルは、『ノウス』。意味は『今』。

光と闇を半々に分け、見る人によってはどちらにでも解釈できる至高の一品。描いた彼女に実際はどちらなどと聞くと、彼女はどちらでもないと答えた。これにより、ますます『ノウス』に対する画家たちの議論は過熱していく。

だが、実際は彼女にとつて本当はどうぢらでもない。といつものではなく、どうでもいいが正解なのだ。

ユナは自分が描いた作品が完成すると、それは意味がなくなつたと解釈し、過去の遺物として処理する。ゆえに、その作品がどうなると、どうあらうと、どう見られようと、特に興味はない。

そして付け足して言えば、『ノウス』が現しているのは光でも闇でもなく、悲しみである。それに気付かない自称お偉い評論家たちは全員阿呆だと思う。ユナだって一人の女の子。
それを考えれば答えは一つしかないだろうに。

「アーチャン……」

「あ、ごめん。怒った顔してた？」

「うんにー。そういう顔も好きだからいいよー」

そうして、彼女の身柄はユナの両親の親友であつた俺の両親が引

き取ることになつたのだが、噂になつた『ノウス』を国が買い取ると言い出して、莫大な賞金が彼女に手渡されたため、現在彼女は一人で何不自由なく暮らしている。

が、やはり。金はあっても動こうとはしないので、いつもやつて生活に関する面倒はうちが見ているのだが。メイドでも雇えはまるかにいいだうに。

と、いうわけで彼女についての概要は以上である。
まだまだ説明、補足したいところもあるが、それはゆっくりと付け加えていきたい。

なにはともあれ、彼女が俺の周りにいる幼馴染にして変人。

天才画家こと、ゴナ・ル・サルジエリアである。

「えつちこ」と、しょ?

「却下だ」

よし、学校行こう。

朝日に照らされながら、コナの家の前で俺は背伸びをする。

「相変わらずアーチャンは努力家だね」

「それでもないさ……つと。よし、そんじゃ行つてくるか。多分、今日の昼頃にマーテラさんが来るから。描き終わった絵画、ちゃんと渡しとくよくな」

「うい、了解だよ。今日も勉強、行つてらっせーい

「ああ。行つてくるよ」

そう言つて俺はザヴェード医術学院に向かつ。

ザヴェード王国は、四方八方十六方、グルリと城壁に囲まれた国の要塞だ。門は東西南北に存在する。外から門を通り中に入れれば結構な深さである堀が見えてくる。当然そのまま落下するわけもなく、橋が架けられていてそれを渡つていく。そうしてようやくザヴェードへ入国することが出来るのだ。

戦時中であつた王国を守るために建設された国といつぬの守り。今となつては『もし反乱があつた場合』のためといつ理由でその要塞は意味をなしている。

北西の方角に向けて地面は盛り上がりしていく構成となつていて、その一番上にお城がデデンと聳え立つ。お城からはざぞかし眺めがいい景色なのだろうなあ。一度見てみたい気もするけど、そんぞう城に入る用事などない。貴族ならまだしも、医者の俺では到底……と、いうわけもなく。

実は私、只今そのお城に向かって歩いていっているのです。理由はもちろん、城の領地内部にある学校に行くためで。

「相変わらず豪勢な学校だ」

王国内にある、ザヴェード城領地において、東に位置する土地は全てこれの敷地内とされる。ちなみに、西は騎士学校で、南は魔法機関。そして残りの北の範囲内を城やら貴族街やら色々ある。

医術と、武術と、魔法と、城。それがザヴェード四大箇条である。この四つがあつてこそその国が長きに渡り繁栄を守り続けてこれが理由だ。もう一つの大國、アシュランは魔法に対する研究を最近弱めて別の何かに力を向ける動きがあるそうだと、マーテラさんが言っていたな。何をするかは知らないけど、それが国のために、世界のための動きとなればいいなどちょっとと思つていたりしている。

あ、余談だがマーテラさんは軍人の方。主に経理部門の方で、その仕事の一つがユナの絵画確保だそうだ。ユナの絵はザヴェード中で人気だから国が責任をもつて保管しているらしい。すげえ。

そうこう思つてゐるうちに校門へ到着。

現在俺は全五回生ある中の、二回生。ようやく一年を通して医術学校に馴染んできたところだ。最初の一年はそれはもう大変できつかつたのを憶えている。けれど、やっぱり人間は環境に順応するもので一年すればもう慣れてしまった。

が、一回生はそもそも言つてられない。つい先日まで初めての試験だつた彼らは今日お休みである。理由は年に三回しかない試験の一つを受けた彼らに休息を与えるため。最初の試験ぐらい、ゆっくり休ませてやろううといふ学校側の計らいである。

そんなわけで、今日は一回生から五回生までの登校となる。

門をくぐり、『フォトン』と呼ばれる虹色の並木道を通りながら歩いていく。医術学校と言つても試験の合格点さえ出せば次回生に

進級できる制度で、最低限の素行さえあれば服装やら人格を問題視されることはない。

つまり、結構フリーーダムな輩が多い。

でもしかし、一応入学試験というのもあってそれに合格できないと当然入れない。しかも結構難しいんだなこれが。倍率は……えと、大体毎年四百倍だつだけか。歴史あるザヴェード王国直属の医術学校。しかも階級、出身問わざの完全能力・結果主義をモットーとしたこの世界では考えられない制度だ。

階級・出身がすごい輩は大抵『そっち系』の学校に行くしね。そんな一般人からやや外れた連中が集う学校であつて、暇になることもないし何気に楽しかったりする。

虹色の花が彩る、並木道を歩いていると中道にドーンと存在感全開の像が見えてきた。

いわゆる、前世でいうと『初代校長の像』だ。もう随分と昔っぽいらしきがその姿はまさに学生たちの鏡。それらしい帽子を被つて右斜め四十五度つて感じ。いやあ、どの時代でも同じなのね、こういつのは。ちょっとだけ親近感湧くよ。

「いつも俺らを見守ってくれて、『苦勞さん』

そんな、柄にもないセリフを言しながら、光を反射する眩しい像へ微笑んで。

鼻歌片手に像を通過。すると、何故だろう。足元を風が速く通り過ぎる……ハハツ、これはあれだな。俺の柄にもないキザなセリフに初代の校長が照れちましたか。

まったく、女子にするならまだしも男の俺つて。

クルリと振り返り、心の中で『おいおい』と突っ込みを入れた俺の目の前で。

像の頭が吹っ飛んだ

「…………おお」

つい、そんな感嘆な声を上げてしまつ自分。見れば、初代校長のキラリと輝くその頭部は今や跡形もなく消し飛び、さながら首無しと言つたところであった。

つて！？

「なんじゅうじゅああああああああ」

「おお、やつぱアルトじゅん！ よかつたぜ、上手く止まれて」

止まれて？ 止まれてだと！？

どこのどう見れば校長の頭がなくなつたことで止まれるんだよ！ つたく……たつき吹いた風は校長像の恥ずかしさじやなかつた。きつと、助けてくれと俺に言いたかったのだろう。すまん。

「もう少しマシな登校は出来ないのかよ、お前は」

「ほん。それは無理だぜ、我がライバル」

数秒遅れて、着地。どつやら蹴り飛ばした後はそのまま空中にいたらしい。

降りたった場所は当然今や無き像の頭付近。なんと酔あたりなんと豪快な。なんと変態な。

オレンジ色と黒色の、かなり目立つ髪型をなびかせて、その女は俺を見下ろした。

「おまよん、アルト」

「……おまよん、リリ」

ザヴェード医術学校、一回生主席。歴史ある医術学校史上『最強』と団される女。

ララ・アティーハマスの登場であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8859y/>

異世界でお医者さんを目指します。

2011年12月17日18時12分発行